



第6回(6月下旬号) 『おとなしい兇器』②

by 柴田耕太郎

文法力をつけたいが、無味乾燥な文法書など読みたくない。

そんな読者のために、人気小説の翻訳書に見る誤訳・悪訳をとりあげ、文法面から解説してゆく。題材は最近映画化された『チョコレート工場』の原作者で、日本がロケ地になった映画『007 は二度死ぬ』の脚本家でもあるロアルド・ダール(Roald Dahl)の短編から任意に選ぶ。いずれも原文で 10 ページに満たない短いものだから、読者も自分で訳してみても、この解説を参考に、市販訳との優劣を競ってみてはいかがだろうか。

『おとなしい兇器』は、このシリーズにしては珍しく誤訳・悪訳が少ない。この作品が載っている短編集『あなたに似たひと』は田村隆一の訳。他の短編は(すでに取り上げた『味』のように：実はそれでも誤りが少ない方)あやしい箇所がたくさんあるから、不思議だ。

以前、他のところにも書いたのだが、下訳の出来がよかったのではないかと。田村のやり方は、下訳を和文和訳する体のも(関係者の証言)だったというから、下訳恐るべし、だ。

田村訳の各短編の出来を比べてみたい(望むべくもないが、下訳者を明らかにした上で)が、それには当分時間が掛かるので、去年取り上げた開高健訳『キス・キス』の誤訳・悪訳数(基準を変えたので、本連載での指摘数とは若干異なる)を作品ごとに並べてみる。

明らかな誤訳：語法の無視/ 構文の取り違い/ 語義解釈の誤り、と

悪訳：原文と和文で理解の誤差が生ずるもの/ 日本語として不適切な表現/ 用語等の間違い、に分けて、『キス・キス』内の各短編を調べてみたところ、どうしても許せない誤訳・悪訳箇所---この判断は中野好夫のことば*に従う---だけで以下に記した通り。

*「この問題ではたしか中島健蔵が名言を吐いたことがあり、たしかそれは、『とにかく引用して恥をかかないだけの翻訳でありたい』というのであったように思う。すこぶる謙虚な、人間の限界を心得た名言だと思う」(『酸っぱい葡萄』みすず書房)

	誤訳	悪訳
「女主人」（全9 ページ）	7	7
「ウィリアムとメアライ」（25）	7	3
「天国への登り道」（12）	3	4
「牧師のたのしみ」（21）	6	21
「ビクスビー夫人と大佐のコート」（15）	11	15
「ローヤル・ジェライ」（24）	14	5
「ジョージ・ポーギイ」（21）	21	7
「誕生と破局」（7）	4	2
「暴君エドワード」（17）	26	12
「豚」（17）	9	1
「ほしぶどう作戦」（18）	10	4

誤訳の最悪は『暴君エドワード』

1 ページ当りの誤訳が 1, 5(最良は『天国への登り道』で 0, 25)

悪訳の最悪は『牧師の楽しみ』

1 ページ当りの悪訳が 1, 0(最良は『豚』で 0, 06)

作品ごとの難易度は同じ作者のエンターテインメント作品だからたいしてないと思われるから、この作品による出来のばらつきを下訳の質に帰したい気がするが、読者の判断はどうだろうか。